カナダの文学
CANADIAN LITERATURE
2

石の天使

マーガレット・ローレンス
浅井晃訳

The Stone Angel

マーガレット・ローレンス（Margaret Laurence）
1926年カナダのマニトバ州ニーパワ生まれ。ウイニペッグのカレッジ卒業。高校時代から作品を発表。結婚してアフリカに住む。バンクーバーでその体験を作品に完成。夫と別れてイギリスに移り、『石の天使』を始め、平原の町を舞台とした作品『家の中の鳥』、『神の戯れ』（カナダ総督文学賞）、『火の住人』などを書く。カナダに戻りオンタリオ州で“大学在住作家”を勤め、その間にカナダ総督文学賞を得た『占う人々』を発表。74年以降オンタリオ州レイクフィールドに住み、エッセイやドラマ、子供向けの作品を残して87年死亡。現代カナダ文学を国際的水準に高めた最も重要な作家の一人。

浅井　晃（あさい・あきら）
1925年宇都宮市生まれ。東京大学文学部卒業。
日本カナダ文学会会長。元大正大学教授。
著書『現代カナダ文学』（こびあん書房）
　　『カナダの風土と民話』（こびあん書房）
　　『トーテムポール世界紀行』（ミリオン書房）
共編著『日本とカナダの比較文学的研究――さくらとかえで』（文芸広場社）

カナダの文学②
石の天使
1998年4月10日初版第1刷発行
著者　マーガレット・ローレンス
訳者　浅井　晃
発行者　竹内淳夫
発行所　株式会社彩流社
東京都千代田区富士見2-2-2　郵便番号102-0071
電話03-3234-5931　ファクシミリ03-3234-5932
組版　有限会社ポイントナイン
印刷　株式会社平河工業社
製本　有限会社青木製本
ブックデザイン　ローテリニエ・スタジオ
カバーイラスト　安藤千種
ISBN 4-88202-502-7　C0397　落丁本・乱丁本はお取替いたします

石の天使

The Stone Angel

マーガレット・ローレンス
浅井晃訳

彩流社

THE STONE ANGEL

by

Margaret Laurence

SAIRYUSHA
1998

石の天使

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「石の天使」登場人物

ヘイガー……主人公の女性
ジェイソン・カリー……ヘイガーの父親
マット……ヘイガーの上の兄
ダニエル（ダン）……ヘイガーの下の兄
マーヴイン（マーヴ）……ヘイガーの長男
ドリス……マーヴインの妻
ブラムトン（ブラム）・シプリー……ヘイガーの夫
ジョン……ヘイガーの次男
ドリー・ストーン……ヘイガーのおばさんで家政婦
シャーロット・タッペン……医者の娘
テルフォード・シモンズ……葬儀屋の息子　銀行員となる
ロチ・ドリーサー……ててなしと呼ばれる　テルフォードと結婚
アーリーン……ロチとテルフォードの娘でジョンの恋人
スチーヴン……マーヴィンとドリスの息子
クリスティーナ（ティーナ）……マーヴィンとドリスの娘
クララ……ブラムの死んだ前妻
ジェスとグラディス……ブラムとクララの娘たち

一

町を見下ろす丘の端に、その石の天使像は立っていた。私のしぶとい命と引き替えに、か弱い魂を昇天させた母の思い出のために建てられた像だった。今でもそこに立っているのかしら。父は母の遺骨を納めた場所を誇る印として、また自分の支配権を永遠に主張するつもりでその天使像を買ったという。

夏も冬も天使は見えない眼で町を見下ろしていたけれども、二重の意味で盲目だった。石でできているからだけでなくて、見せかけの眼すらなかった。天使を彫った人が、目玉を彫り込まなかったからだ。天使が見も知らない私たちを、天国に招こうと町を見下ろしていることが不思議でならなかった。父はよく「あの像は大金かけてイタリアから持ってきたんだ。純白の大理石だよ」と言ったものだが、私は幼くて何のための像なのかわからなかった。今思うと、遠い国の太陽のもとで、彫刻の巨匠ベルニーニのつむじ曲がりな末裔の石工たちが、二十ほどまとめて彫ったものの一つに違いない。異国のやぼったい成り上り者が望みそうなものを、素晴らしい正確さで作り上げたのだ。

天使の翼は、冬は雪に覆われ、夏は茶色い砂塵に埋もれた。マナワカの墓地には、ほかにも天使像はあったけれど、これが一番最初のもので、一番大きくまた一番お金のかかったものだというの

は確かだ。

ほかの天使像ときたら、私の記憶では全く出来の悪い貧弱なものばかりで、たとえば口をとがらせた子供の天使だったり、石の心臓を高く掲げているものとか、弦のない小さな石のハープを、音も出ないのに奏でているものとか、碑文をうっとりと流し目で見ているものなどだった。こんな碑文もあったっけ。その石碑が建った時には私たちは笑ったものだ。

安らかに眠れ
労苦より解き放たれて、ここに終焉せし
リジャイナ・ウイース
一八八六年

哀れなリジャイナはこれだけでおしまいだった。マナワカではもう忘れ去られている。（このヘイガーも同様に忘れられているに違いないのだけれど。）それにしても、いつも私はこの娘は自分一人で責任を負っていると思ったものだ。ひ弱で弱気でプリンのように温和なこの娘は、キンキンした声を出す恩知らずなおっかさんに、来る年も来る年もひどい扱いをされながらも尽くしていた。リジャイナが原因不明の少女期の病気で死んだ時、評判の悪いその老いさらばえた母親は、不快なにおいのするベッドから起き上がり、それから十年も長生きして、家庭持ちの息子たちをがっかりさせた。この老婆に魂よ安らかに、などと言う必要はない。地獄で意地悪く笑っていることだろう。清純なリジャイナが天国で嘆いているというのに。

夏になると、葬儀場特有のシャクヤクの匂いが糖蜜のようにこってりと墓地にただよった。真紅とピンクの壁紙色をしたシャクヤクの豪華な花は、その重みをきゃしゃな茎では支えきれないで、雨に打たれてすっかりおじぎをしていた。そしてビロードのような花びらには、厚かましい蟻たちが用ありげに歩き回っていた。

少女時代に私はよく墓地を散歩した。そのころは気取って歩けるようなところはあまりなかった。子供用の白いブーツに長いスカートをはいて小径を歩いていると、アザミの刺にスカートを引き裂かれて、みっともない目に会ったものだ。私はあのとりすまして歩いたブラウニングの詩の主人公ピッパのように、人生は端整なものを祝うためにだけ創られたのだと思い、どんなにこぎれいできちんとしていたいと願ったことだろう。

時には雑木林を揺るがせて吹く風が遠慮なく熱風をもたらすことがあった。そんな時には、手入れの行き届いた死者の住まいにまで侵入してくるがさつなシバムギ草の間から、キバナクリンザクラの香りがさっと舞い上ったものだ。そうしたけばけばしい野草たちはしっかりと根を下ろしていた。そして墓地の縁のところでは、見苦しくないようにと、死者を愛する縁者たちが千切り取って伸びるのを押さえてあったけれども、そこを歩く人々は、自然のままに乱れ咲いている草花のかすかなジャコウのような香りを、ほこりのにおいとともにほんの短い間かぐことができた。その草花は、あの堂々と咲くシャクヤクやこわばった翼をつけた天使たちのまだいなかった頃、つまり平原の木立ちの間を謎めいた顔とつややかな髪のクリー・インディアンが歩き回っていた頃からずっと生えていた。

いま私はとめどなく思い出に浸っている。こんなに思い出に耽るなんてあまりないことだ。とにかくしょっちゅうあることじゃない。老人は過去に生きると言う人もいるけれども、ばかげている。実際どうでもいい毎日なのに、最近私にとって珍しいことが一つずつ起きている。それらを初咲きのタンポポのように、花瓶に挿して愛でていたい。そうすれば雑草とは見えないだろうし、身近かにあればこれは素晴らしい。しかし私たちはマーヴィンのような人間のためには、いつも偽りの姿をとることになる。というのは、あの子はどういうわけか、大人しいウサギが柔らかいレタスの葉を糧とするように、時代が変われば習慣も変わるという穏健な心得を糧とする老婦人の姿に心をなごますような人間だ。こういう私はなんと意地悪なんだろう。でもいいじゃないの。こんなふうに人にけちをつけることが私の唯一の楽しみで、退屈の余り十年前にたばことともにおぼえた習慣なんだから。マーヴィンは、私が九十にもなってたばこを吸っているのは恥ずかしいことと思っている。何の因果でこのヘイガー・シプリーを母親に持ち、その母親が、節々の傷んだ指の間に火のついた巻きたばこを挟んで、厚かましく構えているのを見ると気が滅入ってしまうものらしい。

今たばこ一本に火をつけて部屋の中をよたよた歩き、腹を立てながらいろいろ思い出している。というのも、この部屋の中に閉じ込められているからにほかならない。でも声を上げて独り言を言わないように気をつけよう。そうしたらマーヴィンはドリスを見、ドリスは意味ありげにマーヴィンを見返して、「お母さんは若い日に戻っているよ」などと言うだろう。言わしておけばいいさ。人が言うことを気にして何になるというの。気にするのはもうたくさんだよ。

そう、今は亡き男たちの思い出がある。いや、それはやめておこう。あの太ったドリスに泣いて

いるところを見られたら面目丸つぶれだもの。この部屋のドアには鍵がない。夜になって私が急病にかかり、面倒を見ようにも入れなかったらどうします、とあの人たちは言う。（面倒を見るなんて草木じゃあるまいし。それとも金のなる木のこと？）だからあの人たちは好きな時に私の部屋に入ってこられる。プライバシーは、老人と小さな子供には許されない。小さな子供と老人は、時として顔を見合わせて、ひそかに共感のまなざしを交わすことがある。中間の人々、つまり本人たちに言わせれば人生の盛りにいる連中から見ると、子供と老人は人間ではないのだ。

あれはたしか六歳の時だ。格子縞のエプロンを貰ったことがある。薄みどりと薄赤の、そうピンクじゃなくて、どちらかというとまるで熟した西瓜の果肉のような淡い赤だった。オンタリオ州に住んでいたおばさんが作って、豪華に黒い別珍の飾りをつけたものだ。そのエプロンをして、小さい孔雀のように、板敷きの道路を得意顔で歩いていたのはほかならぬ私だ。きらびやかで高慢ちきで生意気で、黒い髪のジェーソン・カリーの一人娘だった。

学校に上がるまでは、私はドリーおばさんにとってとても手に負えない子だった。その大きな家は、マナワカで二番目に建った煉瓦の家だったけれど、その頃はまだ新しかった。おばさんは家政婦として雇われて来ていて、期待に沿えるように生活しなければと思っていた。おばさんは未亡人で、私が生まれた時から家にいた。朝は白いレースの室内帽をかぶっていた。私がそれをつまみ上げて、おばさんのもじゃもじゃした髪を、ちょうど牛乳を運んで来たルーベン・パールの目にみえみえにしたとき、おばさんは魔女のような金切り声を私に浴びせたものだ。そんなことがあると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おばさんは私を父の店に送り出した。父は干しあんずや干しぶどうの入った樽に囲まれ、包装紙の匂いのするところで私をりんごの空き箱に腰掛けさせたものだ。そして織物類の売り場から布の束を取って並べながら、私に度量衡を暗記させた。

「二グラスが一ノギン、四ノギンが一パイント、二パイントが一クオート、四クオートが一ガロン、二ガロンが一ペック、四ペックが一ブッシェル」

父はカウンターの後ろにチョッキ姿の大きな体を置き、私がつかえるとスコットランドなまりの声で叱り、一心にやらないと覚えられないぞと言う。

「大きくなってでくの棒になりたいのか？　おたんちん」

「いやです」

「じゃあ一生懸命やれ」

私がトロイ衡と尺度単位と英国乾量単位と容積単位をすっかり暗唱できると、父はうなづいた。

草のねっこよ藁の根よ、
お前でかした覚えたぞ

ちゃんと暗唱すると父はこう言ったものだ。父は一言でも一分でも無駄にすることを嫌った。独力で身を立てた人だった。無一文から出発して、人の世話にならずに世の中に出たんだぞと兄のマットとダンによく話していた。それは本当だ。誰も否定できなかった。二人の兄は母に似て、滅多にうまくいかないのだけれど、父を喜ばそうと努めるような、やさしい気弱な男の子たちだった。

私だけが、ちっとも望まないのに父に似て頑丈で、わし鼻で、まばたき一つしないで相手の目をじっと見ることができた。

父は説教の威力を信じていた。曰く「悪魔は怠け者を仕事場にする」と。説教は父にとっての主の祈りであり、使徒信条だった。父は説教の言葉を、ロザリオの珠のように、あるいは現金箱の中の貨幣のように唱え上げた。曰く「神は自ら助くる者を助く」曰く「餓鬼も人数」といった具合に。

父はいつも鞭にカバの小枝を使った。カナダでの事ではなかったけれど、祖父が父に用いたものだった。マナワカの付近にカバの木がなかったら、父は何を鞭にしたか見当がつかない。幸いこの辺りの林にはカバの木が何本かあったけれど、細くて貧弱で決して大きくならなかった。それでも用は足りた。マットとダンは男の子だったし、年が上だったからしこたま鞭をくらった。そうするとその腹いせに私の所へやって来て鞭を振るうのだった。ただし葉っぱの付いたままの緑色のカエデの若枝だった。そんな柔らかい葉が痛いとは思えないようだけれど、脂肪がついてまだぽってりしている子供の裸の横腹に当たると、実際痛かった。私は地獄に住む口の裂けたけもののように、痛いからだけでなく口惜しさから泣き叫んだ。すると二人は、もし告げ口をするなら食器室に下がっているのこぎり歯のついたパン切りナイフで喉を切り裂くぞ、そうすると赤い血が出てお前はシモンズ葬儀場で見た白いサテンの箱に入っているハンナ・パールの死産した赤ん坊みたいに、哀れな姿になるだろうよと言って黙らそうとした。しかし私は、マットが学校で眼鏡をかけているので「四つ目」と呼ばれているのを聞いていたし、またドリーおばさんが、八つにもなっておねしょをしたと言ってダンを叱っていたのを知っていたから、ひどいことはとても出来ないだろうと思い、告げ口してやった。それで事は終わった。二人がそれによって受けた罰は大いに効き目があった。

父は私に用心するように言った。後になって告げ口して悪いことをしたと思い、兄たちにそう言おうとしたのに聞いてもくれなかった。

兄たちだけが鞭で叩かれたわけではなかった。白状すると、私もたまには痛い目に会うことがあった。父は店がこの世にまるで一つしかないみたいに自慢していた。マナワカで最初の店だったから、自慢するのも無理はないのだが。父はカウンターに身を乗り出さんばかりに大手を広げ、おおにこにこの笑顔で客を迎えたので、世界中を歓迎しているかと思えるほどだった。

マクヴィティ夫人は弁護士の奥さんだったが、派手なボンネットをかぶって店に現れ、ほほ笑みを返すと卵をくださいと言った。私はよく覚えているけれど、奥さんは茶色の卵を望んだ。そのほうが白いのより栄養があると信じていた。私のほうは、黒いボタンつきのブーツと、藤色とベージュの縞のストッキングをはいて、父が東部の都会へ注文して買ってくれた気の利いた長袖の服を着ていた。そして干しぶどうの入っている樽に鼻をつっ込んで、父が忙しくしている間に一つかみほど戴こうとしていた。

「あれー、見てよ。変なちっちゃな虫が走り回ってるよ……」

ほとんど見えないくらいの小さな脚をちょこまかと動かして、下の方へ潜りこもうとしている虫たちに笑ってしまったが、見に来た父の偉そうなひげと怒った顔の前に、平気で出てきて小馬鹿にする虫たちの様子は愉快だった。

「行儀が悪いよ、お嬢さん！」

父はこう言って私を殴ったけれど、客が帰った後に店の裏で受けた罰に比べると、何でもないのに等しかった。

「お前はわしの店の評判をなんとも思わんのか」
「だって見たんだもん！」
「それを人に聞こえるように言うことはないだろう」
「そんなつもりはなかったけど……」
「やってから謝っても遅いんだ。手を前に出しな」
父に泣くところを見られたくなかった。それほど私は腹が立っていた。父は物差しを使った。ひりひりする手を引っ込めると、父はまた手を前に出させた。そして涙を見せない私の目を怒った表情で見た。まるで泣かないのは父の落度であるかのようだった。それで何度も何度も叩いたが、とつぜん物差しを投げ出すと私の体を腕の中に抱えた。あまりきつく抱き締めるので、樟脳の匂いのする父の洋服のざらざらした布地に息がつまりそうになった。私は恐くなって、父を押し離したかったのに、それもできなかった。父はやっと離してくれたけれど、ばつが悪そうだった。説明しようにも説明するすべがないという風だ。
父はそれで全てがはっきりするかのように言った。
「お前はわしに似とるな。お前には気骨がある。それは認めてやる」
父は荷箱に腰を下ろすと、私を膝の上に乗せて声をひそめて早口に言った。
「お前にわかって欲しいことはだな、わしがお前に物差しを使わなきゃならん時は、お前と同じくらいわしも辛いんだよ」
それまでにもう何度も聞いたせりふだ。でも大きな黒い目で父の顔を見ていると、それがしらじらしい嘘だとわかる。私は確かに父に似ていた。その点で父の言った事は間違っていなかったけれ

ど。
私は逃げ出す構えをして戸口に立った。
「みんな捨てちゃうの？」
「何のことだ」
「干しぶどうよ。みんな捨てちゃうの？」
「大きなお世話だ。よけいな世話をやくと……」
笑いと涙をこらえると、私はくるりと向きを変えて逃げ出した。

その年、私たちの仲間がおおぜい小学校にあがった。シャーロット・タッペンは医者の娘だった。髪は栗色でおかっぱにして緑色のリボンをつけていた。私の方はドリーおばさんからまだお下げ髪にされているというのに。シャーロットは私の親友で、よくいっしょに学校へ行った。そしてロチ・ドリーサーのようにお父さんの居場所が知れず、名前さえわからなかったらどうだろうなどと話し合ったものだ。私たちはロチを「ててなし」とは決して呼ばなかったけれど、男の子たちはそう呼んでいた。私たちは卑劣な事とは知りながら、そのことでくすくす笑った。それには半分後ろめたい興奮をおぼえたけれど、テルフォード・シモンズが男子便所に行くのが面倒なので、藪の陰で用足しするところを見た時の感じと似ていた。
テルフォード・シモンズの父親はあまり敬意を払われていなかった。葬儀屋を経営していたが、お清めに使う五セント貨を持っていた事はなかった。
「奴は金をちびちび無駄遣いしてるからなあ」と父は言った。

しばらくたって私は、それが酒を飲むということだと知った。ビリー・シモンズは死体に塗る香料を飲んでいるとマットが言ったことがある。長い間私はそれを本気にしていた。それで死体を食う鬼だと思い、通りで出会うと大急ぎで走って逃げたものだ。実際は気が優しくよろよろしながら歩き、テルフォードにカエデチョコを渡してみんなに配ってくれたこともあった。

テルフォードは縮れっ毛で、それに少しどもりだった。自慢できることと言えば、安置室に時々置かれる死体のことだった。私たちが本当にそこに入れるはずはないと言うと、即座にみんなを連れて行って、ヘンリー・パールの妹、つまり死んだ赤ん坊を見せてくれた。そこへは地下室の窓から忍び込んだ。テルフォードが先頭になり、ロチ・ドリーサーが続いた。ロチは小柄で身が軽く、刺しゅう用の絹糸のようにきめの細かい黄色い髪で、継ぎが当って何度も洗ってがさがさになった服を着ていたが、実にずうずうしかった。その後から、シャーロット・タッペン、ヘイガー・カリー、ダン・カリー、それにヘンリー・パールと続いた。ヘンリーは行きたくないと言ったが、もし行かなかったらみんなに憶病と言われる上に、こう言って囃されるからしかたなく加わったのだ。

ヘンリー・パール
女の子みーたい

実際は少しも女の子みたいではなかった。大柄で不器用な少年で、毎日自分の馬に乗って農場から町へやって来た。家の仕事の手伝いがたくさんあったので、私たちとあまり遊び歩かなかった。安置室の中は町の氷室のようにひんやりしていた。氷室は冬に川で切り取った氷塊を、夏中おが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com